

「水とみどりの『美の里』づくりへの対応検討準備会」の活動

Activity Report on Exploratory Committee for "Beautiful Village Plan"

橋本禪*, 佐藤洋平**, ○牧山正男***

HASHIMOTO Shizuka, SATO Yohei and MAKIYAMA Masao

1. はしがき 水とみどりの「美の里」プラン21（2003年）に対応すべく、本学会では同年秋に「水とみどりの『美の里』づくりへの対応検討準備会」（以下、準備会；Table 1）を設立した。2004年度からは(1)知の蓄積；研究の推進、技術開発、知識の蓄積、(2)人材の養成；研究者・技術者の養成、(3)情報の発信；出版・シンポジウム・IT等の多様なメディアを通じた情報発信、の3つを大きな柱に掲げ活動を行ってきた。本稿では準備会の2004年度の活動を報告し、今後の活動について展望する。

2. 活動経過 2004年度は、①各地方農政局の活動方針・方向の把握と、準備会の活動趣旨の説明を目的とした、各地の「水とみどりの『美の里』づくり懇談会」にオブザーバ参加した（2004年度は5地区）、②景観研究への足がかりとして、また上記の“3つの柱”の実践を目指し、各幹事による景観に関する研究のレビューを元に、研究・人材データベースを作成した。

3. 研究・人材データベースの作成 前章②は以下の手順によって行った。

(1) レビュー対象の絞り込み 今年度は日程の制約から、邦文の査読付き学術論文に限定した。

(2) キーワードの収集・設定、分担 各幹事は自らの研究計画に応じて検討希望課題を提示した。委員長、幹事長はそれを元に、農村における美の里づくりの対象（建築物、集落、土地改良施設、農地、里山、生物・植物、気象・気候、土壌）について必要と思われるキーワード（31件）を設定し、それを各幹事が提示した課題を考慮しながら割り振った。

(3) 論文検索とレビューの実施 Felixのキーワ

ード検索によって得られた論文を各幹事がレビューし、統一様式のレビューフォームに整理した。フォームへの記入項目はタイトル、雑誌名、著者名（所属）、キーワード、要旨、対象地、方法論等である。結果として2004年度の全レビュー件数は245件である（Table 2）。

Table 1 準備会の委員、幹事（2004年度）
Members of the committee

委員	○佐藤洋平、有田博之、石田憲治、牛野正、小池聡、齋藤雪彦、谷口建、中野芳輔、山本徳司
幹事	○橋本禪、石井敦、大野研、九鬼康彰、坂田寧代、武山絵美、中村貴彦、服部俊宏、牧山正男、三宅康成、弓削こずえ

（注）○は委員長または幹事長、他は50音順

Table 2 キーワードおよびレビュー件数
Keywords and the number of the reviewed papers

キーワード	数
景観計画	28
土地利用計画・ゾーニング	3
土地利用調整	5
土地利用・土地利用変化・景観変化	0
まちづくり条例・景観条例	11
景観（環境）紛争	2
受益と負担	11
圃場整備・換地・換地計画	18
土地評価	12
集落整備・集落計画・集落地区計画	0
集落活動・女性・精神	1
都市農村交流	5
活性化・意識変容	0
棚田オーナー制度・棚田景観・棚田利用	10
市民農園・クラインガルテン	2
農村観光・グリーンツーリズム・里山	14
持続的農業	1
農地転用・農地保全	2
遊休農地・耕作放棄地の利用と防止	14
ビオトープ・エネルギー作物・景観作物・鳥獣害対策	9
景観形成が農業生産環境、微気象、生物多様性に及ぼす影響	12
農業生産環境、微気象、生物多様性に配慮した景観形成	2
景観評価	14
美意識	0
景観の構成要素・景観の分類	0
空間認知・空間認識	14
景観デザイン・景観色彩	4
造景・修景・借景	0
文化財・土地改良施設・建築物	1
景観概念・農村景観・文化的景観・歴史的景観	7
ワークショップ・住民参加	3
その他	40

*日本学術振興会特別研究員 JSPS Research Fellow, **東京農業大学 Tokyo University of Agriculture, ***茨城大学 Ibaraki University キーワード：水とみどりの「美の里」プラン21、景観、テキストマイニング

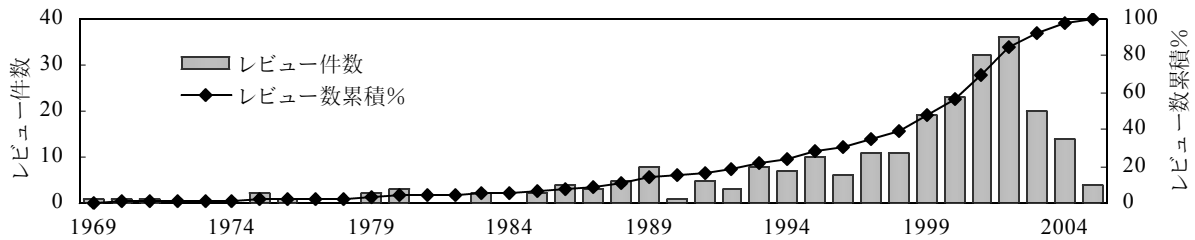


Fig.1 各年次のレビュー文献数
The number of the reviewed papers each year

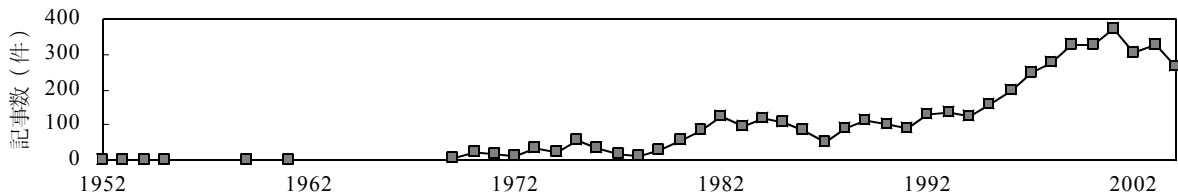


Fig.2 「景観」をタイトルに含む記事数の推移
The change of the papers which contain the word "keikan" in their titles

4. 「美の里」づくりにおける研究の動向

(1) データベース分析 レビュー文献の約53% (129件) が2000年以降のものである (Fig.1). 人材データベース作成のためには近年の動向を把握する必要があることから、このような偏りは妥当である。一方、研究データベース作成の観点からは、(2)で述べるような過去の研究動向を十分に把握できていないという問題がある。

245文献のタイトルについて、日本語形態素解析システム「茶^{ちや}箆^{せん}」によるテキストマイニングを行った結果、出現頻度は、「景観」141件をはじめとして、「地域」50件、「評価」47件、「空間」38件、「計画」「住民」「農村」34件、「都市」31件、…で高かった。幹事の関心の多くがこれらの出現頻度が高いキーワードに集中していることが考えられる。

(2) 景観研究の動向 「景観」をタイトルに含む雑誌記事をFelix検索したところ、4566件が該当した(2004年11月時点)。1995年以降に顕著に多くなっている (Fig.2)。都市計画論文集142件など、都市計画・造園・建築計画といった計画系の学術雑誌で多い(ただし農村計画学会誌は計画系の中では低位の20件)のに対し、土木系では総じて低い。農業土木学会誌は48件、農業土木学会論文集は7件である。

これらの雑誌記事について(1)と同様にテキ

ストマイニングを行った (Fig.3) 結果、その多くは都市や計画、環境、評価という観点から景観を論じた内容であることが推測できる。一方、本学会が対象とする「歴史」「保全」「農村」「文化」等の出現頻度は低い。つまり、これらの観点から景観を論じた雑誌記事は、母集団全体の中では多いものの、都市や計画、環境、評価との関係で論じた雑誌記事に比べると相対的に少ないといえる。

5. 準備会の今後の活動

以上を踏まえると、研究・人材データベースのさらなる充実を図るべく、継続的かつ発展的な文献レビューがまず求められよう。また今回の企画セッションの他に情報発信の機会を持つこと、さらには人材養成を主たる目的とした研究プロジェクトについて、その実現可能性や方向性について議論する必要が挙げられる。

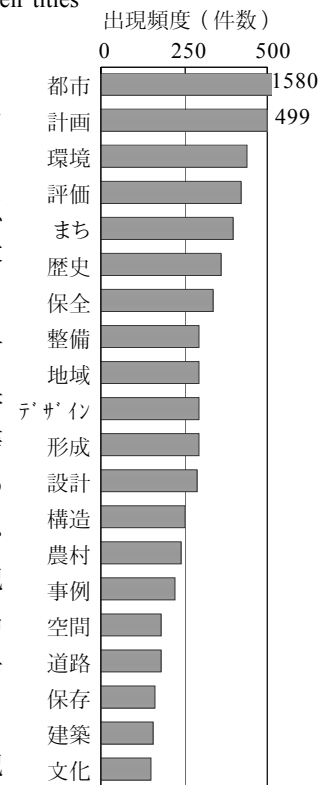


Fig.3 主なキーワードの出現件数
The number of the papers which contain the major keywords